琉球大学学術リポジトリ

プリシード・プロシードモデルを活用した性教育プログラムと性行為意識の変容　－高校2年生の保健「性意識と性行動の選択」の授業を通して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2011-04-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 太田, 輝昭, 香田, 光彦, 大城, 一基, 金城, 昇, Ota, Teruaki, Koda, Mituhiko, Osiro, Ikki, Kinjo, Noboru
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19041

プリシード・プロシードモデルを活用した性教育プログラムと性行為意識の変容

－高校2年生の保健「性意識と性行動の選択」の授業を通して－

太田　輝昭*　香田　光彦**　大城　一基***　金城　昇****

Sexual education program through Precede-Proceed model, and raising awareness of sexual activities.

～A health lesson for 2nd year senior high school students ; A lesson on sexual choices sexual awareness and sexual acts.～

Teruaki Ota※1　Mituhiko Koda※2　Ikki Osiro※3　Noboru Kinjo※4

Ⅰ　はじめに

1　性教育プログラムの必要性

近年、10代の性行動、男女交際の問題点が指摘されている。

① 若い年代に性感染症が増えている。(HIV感染の危険)[注1)]

② 若い年代の人口妊娠中絶数が多い。[注2)]

③ 初交経験年齢が低年齢化している。[注3)]

④ デートDVによる被害が多い。[注4)]

この問題を解決するために、学校教育の果たす役割は大きい。

1950、60年代に行われた古典的健康教育から、70年代から社会的要因への対処スキルの形成に焦点を当てたライフスキル健康教育が有効とされるようになってきた[1)]。今まで、喫煙防止教育、食生活教育、歯周病予防教育、運動教育、ストレスマネージメント教育のプログラムは活発に研究されてきた。しかし、思春期の高校生を対象とした性教育のプログラムはまだまだ発展途上であり、数多くのプログラムが必要とされている。

そこで、本研究ではプリシート・プロシードモデルに性教育プログラムをあてはめて介入授業を行った。

2　プリシート・プロシートモデルの概要

PRECED-PROCEED[2)] はL.W.グリーンらによって作られた。このモデルは当初、費用便益分析手法を用いた評価のフレームワークとして開発された[3)]。このモデルは系統的に臨床やフィールドで適用され、企画ツールとしての有効性と妥当性が確認されてきた。プログラムの企画と評価に多彩な分野の理論を盛り込んだ組織立ったフレームワークとして認められてきた[4)]。

Precede-Proceedモデルは保健プログラムの企画・評価モデルであり、８段階でなりたっている(Fig.1)。第１段階から４段階まではアセ

*　琉球大学大学院　教科教育専攻　保健体育専修（向陽高等学校）
**　琉球大学教育学部　教科教育専攻　保健体育専修
***　琉球大学教育学部　保健体育
****琉球大学教育学部　心理臨床科学コース

スメント・データをもとにプログラムの優先事項、目的、対象を決める段階である。これをPrecedeという。次に、第5段階から8段階になるとプログラムの最終地点や目的の達成状況、到達状況を評価しながら実行していく過程をProceedという。PrecedeとProceedは一つとなって、企画―実施―評価という一連の段階を踏まえて進んでいく。

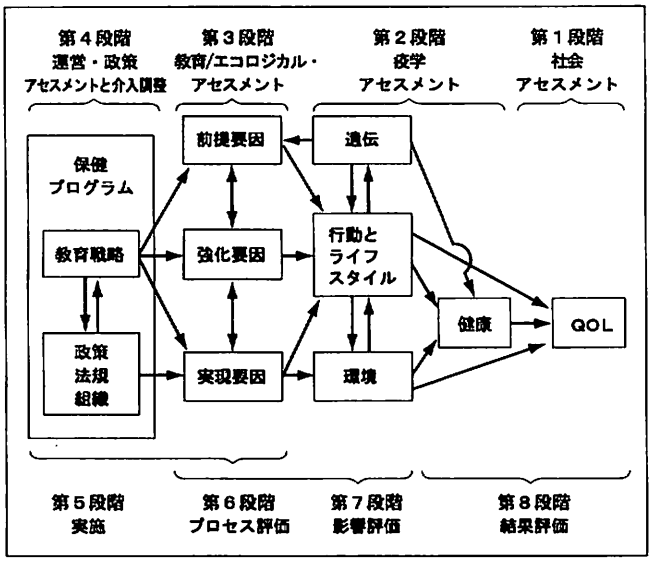


Fig.1　保健計画の企画と評価のためのPrecede-Proceedモデルの統括図[5)]

このプログラムの規模はさまざまである。国家的な巨大プログラムをこのフレームに当てはめて実行することもあれば、学校全体で行う保健プログラムもある。本研究は、さらに小さい保健体育の「保健」での「性教育」に焦点をあてて、このフレームを活用した。第1段階から第3段階までは質問紙法によるアセスメント（事前調査）を行った。性教育プログラムは第3段階の準備要因、強化要因をもとに作成した(Fig.2を参考にした)。

なお、授業づくりの前提として、事前調査の結果から「生徒の性に関する意識」をPPモデルにあてはめ巻末に『付録』として添付する。

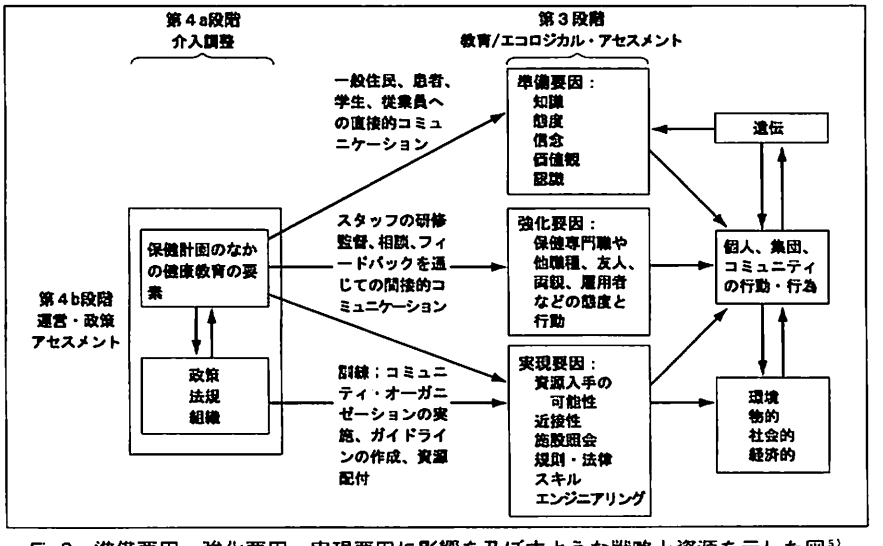


Fig.2　準備要因、強化要因、実現要因に影響を及ぼすような戦略と資源を示した図[5)]

「準備要因」は「知識」「態度」「信念」「価値観」「認識」である。これらは生徒の動機を高めたり低めたりする。この部分を３つの資料で生徒に提示した。

①身近な「クラスメイトの性についての考え方」のデータ（態度）

②同年代の体験談や考え方（新聞記事）[6]（認識）

③『さらば、悲しみの性』の著者である河野美代子氏の「女性は自分の体に責任を持て、男性は、女性の体に責任を持て」（価値観）

「強化要因」は、「望まない性行為を迫られた時の断り方」をグループ活動で考えさせ、ロールプレイを行い、コミュニケーションスキルの獲得を目指した。

Ⅱ　研究の目的

本研究では、高校2年保健（第2章「生涯を通じる健康」）12時間配当の２時間「性意識と性行動の選択」の授業プログラムを実践することによって、「性行為意識」がどのように変容するのか、変容したことによる授業プログラムの有効性を検討することを目的とした。

次の調査項目について、事前（５月）、事後（６月末）、追跡（10月）の変容を割合によって検討した。

調査内容

次の調査内容で、組、男女、無記名とした。

質問１　高校生の男女交際はどこまで許されますか。

（ア　手をつなぐまで　イ　肩を組むまで　ウ　キスまで　エ　ベッドまで　オ　セックスまで　カ　その他）

質問２　性行為について、高校生は？

（ア　かまわない　イ　どちらかといえばかまわない　ウ　どちらかといえばよくない　エ　よくない）

質問３　あなたが考える性行為の条件は何です

（ア　愛があればいつでもいい　イ　お互いが同意すれば（援助交際、買春含む　ウ　結婚してから　エ　結婚前提なら）

質問４　もし彼氏（あるいは彼女）から『わたしのことを愛するなら、私とセックスすることで証明して』と言われたら、どうする？

（ア　まだ時期が早いと言って断わる　イ　他の理由で断わる　ウ　その彼氏（彼女）と別れる　エ　彼氏（彼女）の発言に同意しているので受け入れる　オ　彼氏（彼女）の発言に同意していないが受け入れる　カ　その他）

質問５　もし今、性行為をするならば、避妊措置をしますか。

（ア　必ず避妊する　イ　もし相手が要求すれば避妊措置をする　ウ　しない　エ　わからない

Ⅲ　研究方法

１　調査対象

K高等学校２組男子８名、女子19名、３組男子22名、女子16名、４組男子22名、女子17名、計男子52名、女子52名）

２　研究の流れと実施期間、授業回数

本研究は、高校2年保健（第2章「生涯を通じる健康」）12時間の第４時、第５時に実施した。2組、3組、4組の第４時は、教職経験（10年以上）の教師が行い、第５時はR大学4年生（教育実習生）が行った。

研究の流れは次である。

3　単元計画

高校2年、保健（第2章「生涯を通じる健康」）の単元計画は次である。

	2年2組	2年3組	2年4組
1時間目	4月27日(月)	4月27日(月)	4月22日（水）
	思春期と健康①		
2時間目	5月13日（水）	5月13日（水）	5月20日(水)
	思春期と健康②　事前調査		
3時間目	5月25日（月）	5月25日（月）	5月27日（水）
	思春期と健康③		
4時間目	6月1日（月）	6月1日（月）	6月8日(月)
	性意識と性行動の選択①授業(本研究)		
5時間目	6月15日（月）	6月15日（月）	6月10日（水）
	性意識と性行動の選択②授業（本研究）		
6時間目	6月29日（月）	6月29日(月)	6月17日（水）
	事後調査　妊娠・出産と健康		
7時間目	7月13日（月）	7月13日（月）	7月15日(水)
	家族計画と人工妊娠中絶①		
8時間目	8月31日（月）	8月31日（月）	9月9日（水）
	家族計画と人工妊娠中絶②		
9時間目	9月7日（月）	9月7日（月）	9月16日（水）
	結婚生活と健康①		
10時間目	9月14日（月）	9月14日（月）	9月30日（水）
	結婚生活と健康②		
11時間目	9月28日（月）	9月28日（月）	10月21日（水）
	特別授業		
12時間目	10月5日（月）	10月5日（月）	10月28日（水）
	「生涯を通じる健康」　まとめ　追跡調査		

Table　1　単元計画（概略）

4　授業内容

1）第4時の授業（概略）

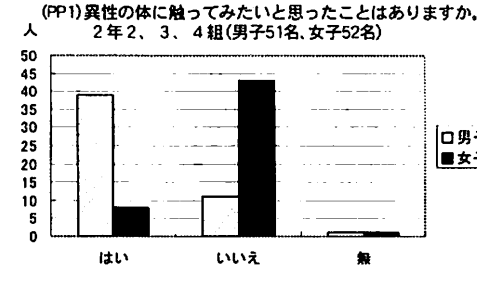
①教科書音読　②カップル写真提示　③男女の性意識の違いa（クラスアンケート提示：PP1）

〈発問例〉皆さんにアンケートをとりました。そのデータです。異性の体に触ってみたいと思ったことはありますか。

男子、「はい」「いいえ」のどちらが多いと思いますか（挙手確認）。

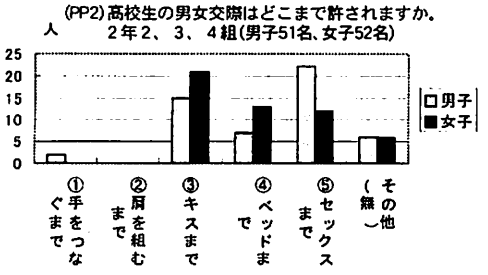
男子は「はい」に手をあげる。女子、迷っている。結果を提示。男子は「はい」が多いことに女子は驚く。

〈発問例〉女子、「はい」「いいえ」のどちらが多いと思いますか（挙手確認）。



男子、「はい」に手を挙げる。女子、「いいえ」と迷っている。結果を提示。男子、女子が「いいえ」の方が多いことに驚く。データを見せる。同じく男子が「はい」に多い。女子は「いいえ」が多い。身近なクラスメイトでこのような逆の結果がでることに皆は驚く。

④男女の意識の違いb（クラスアンケートを提示：PP2）



〈発問例〉高校生の男女交際はどこまで許されますか。アンケート結果です。男子はどこまで多いと思いますか（挙手確認）。男子はセックスまでに手をあげる。女子、迷っている。結果提示。セックスまでが多い。女子は驚いている。

〈発問例〉女子はどこまでが多いと思いますか（挙手確認）。男子迷っている。女子、キスまでに手をあげる。結果提示。予想通り、キスまでが多い。２つのクラスメイトのアンケートの結果で男女の意識の違いを知る。

⑤高校生の男女交際での一つのエピソード（新聞記事）を読む。

【記事の概略】

> 今、彼と交際している。家で2人きりでじゃれ合っているとき、強い力で腕を引っ張られ、抱きしめられ、押し倒された。私はびっくりして、泣き叫んだ。その場から逃げた。彼と体の関係を持ちたくない。彼が好きだけど、どうしたらいいか悩んでいる。

〈発問例〉もし、自分の友達からこの悩みを打ち明けられたら、あなたはどのようなアドバイスをしますか。ノートに書きなさい。

発表させ、友達の意見を聞く。多様な答えがあることを知る。

⑥高校3年女子生徒の意見（新聞記事）を読む。

【記事の概略】

> 私も同じようなことがあった。必死の抵抗で逃げきったものの、それからは、彼の家に行くたびに同じことの繰り返しだった。彼を失うのがイヤで、許してしまった。それからは、会うたびごとのようだった。毎月生理の予定日ごろは、とても不安で、沈んだ気持ちだった一度そういうことを許したら二度三度とズルズルいくことが多い。私の友達で、半年に満たない期間に二度中絶した子もいる。自分の考えを固く持って下さい。一時の感情に流されないで下さい。もし私の友達のようになった場合、心の傷は男女とも受けるかもしれませんが、体の傷は女だけです。後で影響が出るのも女だけです。

⑦高校2年女子生徒の意見（新聞記事）

⑧高校3年生の意見（新聞記事）

⑨17歳少年の意見（新聞記事）

⑩24歳女性の意見（新聞記事）

⑪23歳女性の意見（新聞記事）を次々に読み上げる（新聞記事略）。いずれも自分の体験談から、アドバイスしている。同年代、異性から、先輩女性からのアドバイスは生徒の心に染みる。このような男女交際があるのかと身に迫る思いになる。

⑫性行為による不安

⑬性行為の価値観（「さらば悲しみの性」の著者　河野美代子さんの言葉を紹介する。）

「女性は自分の体に責任を持て。男性は女性の体に責任を持て」

⑭もし性行為をしたくない場合の行動（ライフスキル）練習

２）第５時の授業（概略）

①「断わる４つのコツ」を提示

②グループワーク：5～6人のグループを作り、発表用のプリントを仕上げる。グループ発表。

③各グループ代表の発表。断り方の工夫した点を述べさせる。

④教師の作った３D作成を紹介する。

⑤男女の性意識の違い、互いに責任を。性行為以外でもしっかりと断わる。

5　分析方法

事前、事後、追跡に調査内容を行う。５つの項目による「性行為意識」の変容を割合（%）で示す。事前、事後、追跡による比較を行い、ｘ二乗検定、分散分析が時間系列で確認できるものについては検討した。

統計解析には統計処理ソフトSPSS　Ver14.0J for　Windows を使用し、有意水準は５％とした。

Ⅲ　結果及び考察

1　検証①

〈質問１〉高校生の男女交際はどこまで許されますか。

(ア 手をつなぐまで　イ 肩を組むまで　ウ キスまで　エ ベッドまで　オ セックスまで　カ その他)

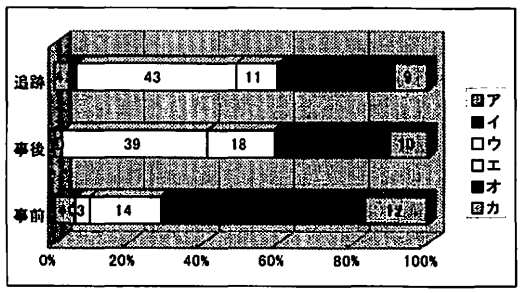


Fig.3-1　高校生の男女交際の許容範囲（男子）

男子の男女交際に関する交際限度をどうとらえているかを授業の前・後・追跡の順にどう変化したかを示した。授業前ではウ(キスまで)の15人(30.0%)とオ(セックスまで)20人(40.0%)であったのが，授業後，ウ20人(39.2%)エ9人(17.6%)に増加し，オは16人(31.4%)に減少した。追跡ではさらにウが23人(42.6%)に増加している。ほぼ維持されていることが確認される。統計的に有意差はみられなかったものの，交際限度が慎重になる傾向がうかがえた(Fig.3-1)。

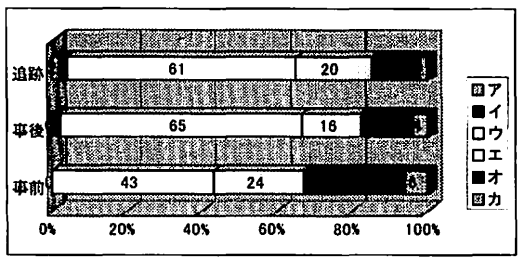


Fig.3-2　高校生の男女交際の許容範囲（女子）

女子の男女交際に関する交際限度をどうとらえているかを授業の前・後・追跡の順にどう変化したかを示した。授業前ではウ(キスまで)の21人(42.9%)とオ(セックスまで)13人(26.5%)であったのが，授業後，ウ33人(64.7%)に増加し，オは7人(13.7%)に減少した。追跡ではさらにオが6人(13.0%)に減少している。ほぼ維持されていることが確認される。統計的に有意差はみられなかったものの，交際限度が慎重になる傾向がうかがえた(Fig.3-2)。

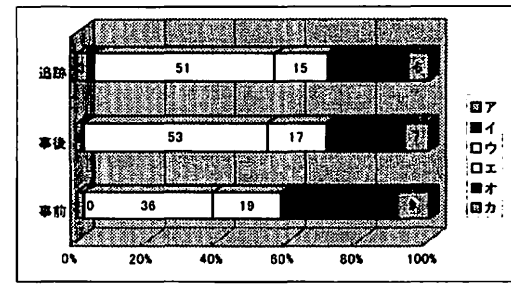


Fig.3-3 高校生の男女交際の許容範囲（全体）

男女交際に関する交際限度（全体）をどうとらえているかを授業の前・後・追跡の順にどう変化したかを示した。授業前ではウ（キスまで）の36人（36.4%）とオ（セックスまで）33人(33.3%)であったが、授業後、ウの53人（52.0%）に増加し、オは23人（22.5%）に減少した。追跡では、ウの51人（51.0%）、オ23人（23.0%）、ほぼ維持されていることが確認される。統計的に有意差はみられなかったものの、交際限度が慎重になる傾向が伺えた（Fig.3-3）。

2　検証②

〈質問２〉性行為について、高校生は？

(ア かまわない　イ どちらかといえばかまわない　ウ どちらかといえばよくない　エ よくない)

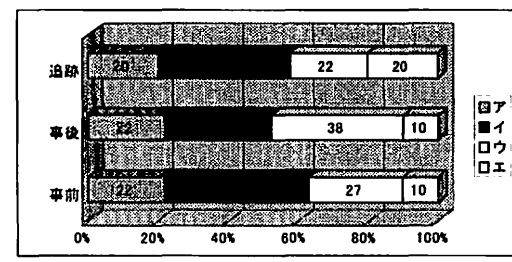


Fig.4-1　高校生の性行為について（男子）

性行為に関する男子の意識について示す(Fig.4-1)。「かまわない」が11人(約21%前後)で推移し，「どちらかといえばかまわない」が事前21人(41.1%)が事後に6人減少，逆に「どちらかというとよくない」に5人移行している。最終的(追跡)に「どちらかといえばかまわない」に5人が戻ったものの「よくない」が事前・事後5人であったものが11人へと6人が移行してい

る。統計的には有意差がみられないものの「どちらかといえばよくない」「よくない」が事後で10.7%移行，追跡で5.3%の変化であった。性行為について、男子は「よくない」「どちらかといえばよくない」と考える生徒が増加した。

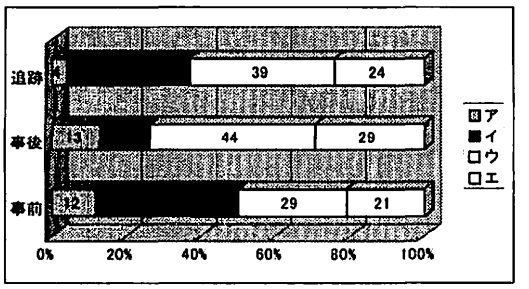


Fig.4-2　高校生の性行為について（女子）

性行為に関する女子の意識について示す(Fig. 4-2)。事前では、「かまわない」、「どちらかというとかまわない」が合わせて26人（50.0%）であったが、事後では14人（27.0%）に減少している。追跡では、17人（36.9%）と事後よりは増加したが、事前と比べると減少している。５％水準では差がみられないものの10%水準では、σ有意差であった。性行為について、女子は「よくない」「どちらかといえばよくない」と考える傾向が見られた。

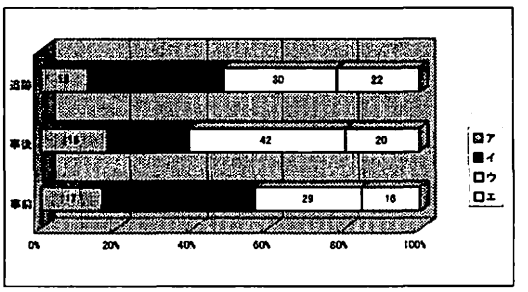


Fig.4-3　高校生の性行為について（全体）

性行為に関する全体の意識について示す(Fig. 4-3)。事前では「かまわない」「どちらかといえばかまわない」が合わせて58人（56.3%）であったが、事後では40人（39.2%）に減少している。追跡では、48人（48.0%）と事後よりは増加したが、事前と比べると減少している。統計的な有意差はないが、「よくない」「どちらかといえばよくない」と考える生徒が増加した。

3　検証③

〈質問３〉あなたが考える性行為の条件は何です

（ア 愛があればいつでもいい　イ お互いが同意すれば（援助交際、買春含む）　ウ 結婚してから　エ 結婚前提なら）

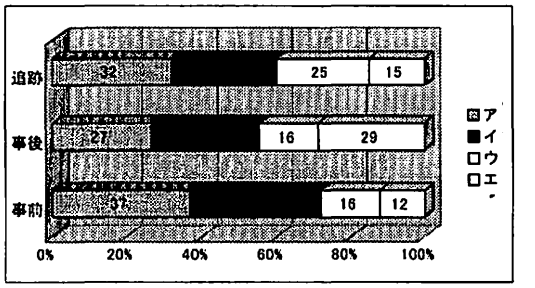


Fig.5-1　性行為の条件（男子）

性行為に関する男子の条件を示す(Fig-5-1)。事前では「結婚してから」「結婚前提なら」が、合わせて14人（28.5%）であったのが、事後では、22人（44.9%）に増加している。追跡ではやや減少するが、21人（39.6%）である。事前よりは、増加している。統計的に有意差はみられなかったものの、性行為を行うことにおいて「結婚してから」「結婚前提なら」と「結婚」を意識した性行為を考える生徒が増加した。

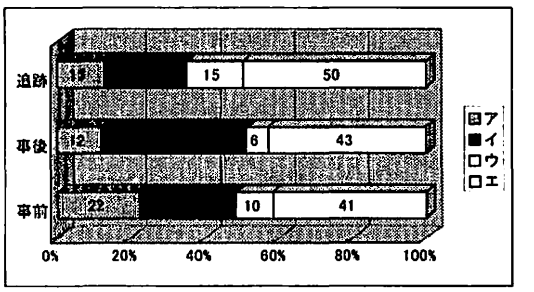


Fig.5-2　性行為の条件（女子）

性行為に関する女子の条件を示す(Fig.5-2)。事前では「結婚してから」「結婚前提なら」が、合わせて26人（51.0%）であったのが、事後では、25人（49.0%）にやや減少した。追跡では30人(65.2%)に増加した。統計的に有意差はみられなかったものの、性行為を行うことにおいて「結婚してから」「結婚前提なら」と「結婚」を意識した性行為を考える生徒が増加した。

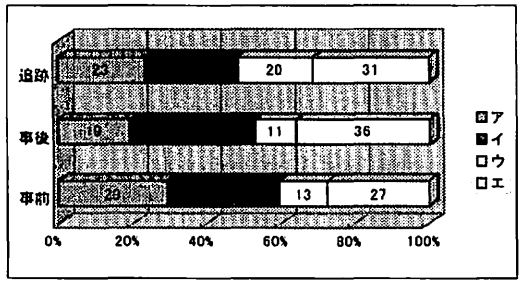


Fig.5-3　性行為の条件（全体）

性行為に関する条件を示す（全体：Fig.5-3）。事前では「結婚してから」「結婚前提なら」が、合わせて40人（40.0%）であったのが、事後では、47人（47.0%）に増加した。追跡では51人(51.5%)に増加した。統計的に有意差はみられなかったものの、性行為を行うことにおいて「結婚してから」「結婚前提なら」と「結婚」を意識した性行為を考える生徒が増加した。

4　検証④

〈質問４〉もし彼氏（あるいは彼女）から『わたしのことを愛するなら、私とセックスすることで証明して』と言われたら、どうする？

（ア まだ時期が早いと言って断わる　イ 他の理由で断わる　ウ その彼氏（彼女）と別れる　エ 彼氏（彼女）の発言に同意しているので受け入れる　オ 彼氏（彼女）の発言に同意していないが受け入れる　カ その他）

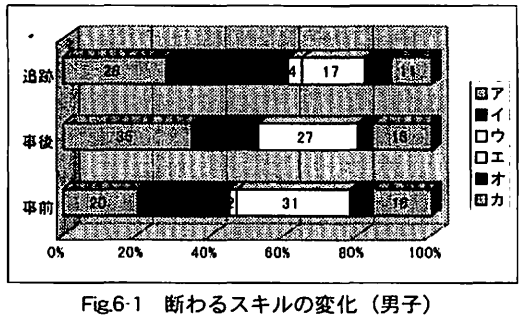


Fig.6-1　断わるスキルの変化（男子）

交際相手から性行為を迫られたときの男子の対応を示す（Fig.6-1）。事前では、「まだ早いと言って断る」「他の理由で断る」が、合わせて23人（45.1%）であったが、事後では27人(52.9%）に増加した。さらに、追跡では、33人（61.1%）に増加した。統計的に有意差はみられなかったものの、交際相手から性行為を迫られたときの「断る」と考える生徒が増加した。

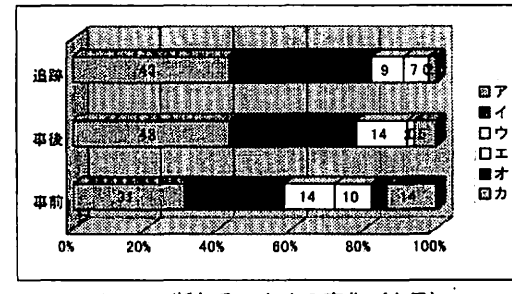


Fig.6-2　断わるスキルの変化（女子）

交際相手から性行為を迫られたときの女子対応を示す(Fig.6-2)。事前では、「まだ早いと言って断る」「他の理由で断る」が、合わせて30人(58.9%）であったが、事後では40人（78.4%）に増加した。さらに、追跡では、38人(82.61%）に増加した。統計的に有意差はみられなかったものの、交際相手から性行為を迫られたときの「断る」と考える生徒が大幅に増加した。

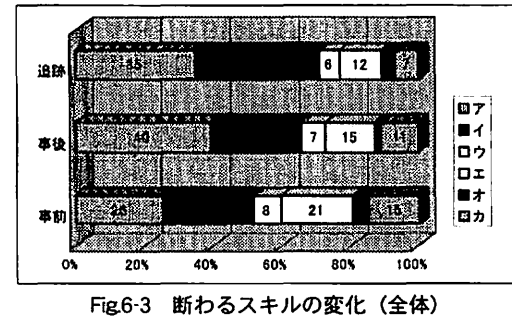


Fig.6-3　断わるスキルの変化（全体）

交際相手から性行為を迫られたときの全体の対応を示す(Fig.6-3)。事前では、「まだ早いと言って断る」「他の理由で断る」が、合わせて53人（52.0%）であったが、事後では67人(65.7%）に増加した。さらに、追跡では、71人（71.0%）に増加した。統計的な有意差がみられなかったものの、事前から追跡にかけて平均点が下がっているので、選択肢の位置をスケールと考えると、アの方向に寄ったということが分かる。交際相手から性行為を迫られたときの「断る」と考える生徒が増加した。

5　検証⑤

〈質問5〉もし今、性行為をするならば、避妊措置をしますか。

(ア 必ず避妊する　イ もし相手が要求すれば避妊措置をする　ウ しない　エ わからない)

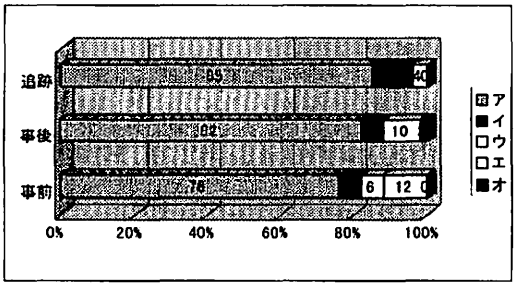


Fig.7-1　性行為の際の避妊措置の有無（男子）

Fig.7-1に性行為の際の避妊措置に関する意識の有無を示す(男子)。事前では、「必ず避妊する」「相手が要求すれば避妊する」が、合わせて42人（82.0%）であったのが、事後では45人（89.3%）に増加した。されに、追跡では、52人（96.3%）に増加している。統計的な有意差がみられなかったものの、性行為の際に避妊措置を行うと考えている生徒が増加した。

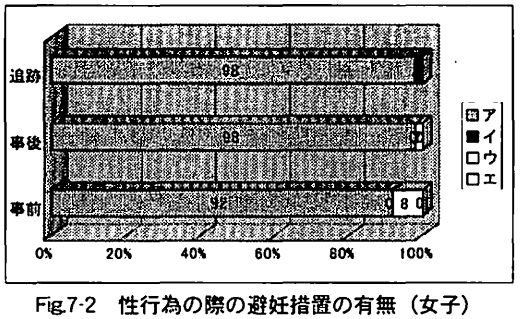


Fig.7-2　性行為の際の避妊措置の有無（女子）

Fig.7-2に性行為の際の避妊措置に関する意識の有無を示す(女子)。事前では、「必ず避妊する」「相手が要求すれば避妊する」が、合わせて47人（92.2%）であったのが、事後では50人（98.0%）に増加した。されに、追跡では、46人（100.0%）に増加している(※人数は減少しているが、調査人数が5名、減少したため)。統計的な有意差がみられなかったものの、性行為の際に避妊措置を行うと考えている生徒の割合が増加した。

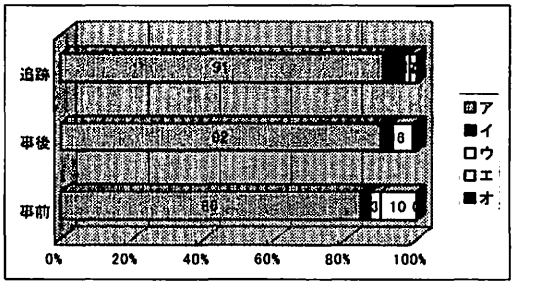


Fig.7-3　性行為の際の避妊措置の有無（全体）

Fig.7-3に性行為の際の避妊措置に関する意識の有無を示す(全体)。事前では、「必ず避妊する」「相手が要求すれば避妊する」が、合わせて89人（87.2%）であったのが、事後では95人（93.1%）に増加した。されに、追跡では、97人（97.0%）に増加している。統計的な有意差がみられなかったものの、性行為の際に避妊措置を行うと考えている生徒が増加した。

以上、検証①～⑤の結果より、PPモデルを使った「性教育プログラム」で以下のように、「性行為意識」が変容する傾向がみられた。

①「高校生の男女交際の許容範囲」
　「キスまで」　36.4%→52.0%→51.0%
　「セックスまで」　33.3%→22.5%→23.0%

②「高校生の性行為は？」
　「かまわない」「どちらかといえばかまわない」の合計　56.3%→39.2%→48.0%

③「性行為の条件は？」
　「結婚してから」「結婚前提なら」の合計
　40.0%→47.0%→51.5%

④「断るスキルの変化」
　「まだ早いと言って断る」「他の理由で断る」の合計　52.0%→65.7%→71.0%

⑤「性行為の際の避妊措置に関する意識の有無」
　「必ず避妊する」「相手が要求すれば避妊する」の合計　87.2%→93.1%→97.0%

高校生の男女交際に対して、安易な性行為に走らないように変容している。性行為に慎重な考え方をするようになっていることが分かる。これはPPモデルを活用した「性教育プログラム」の効力があったことを示している。

Ⅳ まとめと課題

PPモデルを使った「性教育プログラム」により、安易な性行動に走らないように生徒が変容していることが分かる。各クラス2時間の授業は生徒の意識に大きな影響を及ぼしたと考えられる。PPモデルによる授業効果の大きさが分かる。また、事後調査より4ヶ月にもわたり、意識が維持され、また、更に高まったりしていることが追跡調査で分かった。これは、その後の「妊娠・出産」「家族計画と人工妊娠中絶」「結婚生活」による新たな性教育プログラムの影響が大きいことが分かる。

今回、2時間のプログラムを3クラス同時進行で実施した。このプログラムが有効かどうか、コントロール群を設定し、介入群と比較することで統計上の有意差を検討することが今後の課題である。また、2時間プログラムより、12時間の「性教育プログラム」の有効性も検討課題である。

性教育は、性感症問題、エイズ問題、中絶問題、デートDV問題、思春期の男女交際のあり方、等々と課題が大きい。効果を発揮する性教育プログラムは今後も改良され続け、さらなる生徒の変容を期待できるものが現れることを期待する。

＜引用・参考文献＞

1）『心の能力を育てる　JKYBライフスキル教育プログラム　中学生用　レベル1』JKYB研究会編著　東山書房

2）PRECEDとは、pGreen,L.W.,Levine,D.M.,Deeds,S.G.(1975).Clinical trials of health education for hypertensive outpatients : Design and baselin data.Preventive Medicine,4,417-25.

3）Green, L.W. (1974). Toward cost-benefit evaluations of health education : Some concepts, methods, and examples. Heaith Education Monographs, 2(Suppl.1), 34-64

4）Green, L.W., Levine, D. M., Deeds, S.G. (1975). Clinical trials of health education for hypertensive outpatients : Design and baselin data. Preventive Medicine, 4,417-25.

5）『実践　ヘルスプロモーション』ローレンスW. グリーン著　神馬征峰訳　医学書院

6）新聞記事　川神正輝氏（島根県町立中学校）より提供

注1）厚生労働省　性感染症報告数　エイズ動向委員会

注2）厚生労働省　母体保護統計報告

注3）厚生労働省　平成12年「HIV感染症の疫学研究」初交年齢の年齢階層別分布

注4）内閣府インターネット調査　2007年12月6日沖縄タイムス朝刊記事

【付録】

保健の授業づくり(授業プログラムの開発)の前提として，生徒の行動変容を目指すことが保健科教育の目標として第一にあげられる。これまでの知識のみの一方的な教授法では生徒の行動変容が望めないのは周知の通りである。行動変容を目指す場合のプログラムの開発・実践・評価のモデルの一つにPPモデルがある。このモデル構成の重要な段階として「疫学アセスメント(従来は，行動・ライフスタイル診断)」，「教育・エコロジカル・アセスメント(従来は，教育・組織診断)」が位置づいている。特に後者は「準備要因(前提要因)」「強化要因」「実現要因」で構成されている。本稿でもプログラム開発に先立ち事前調査を行い，プログラム開発に活用した。今回の報告では特に，準備要因と実現要因で構成されていた。この付録ではその他の，本校生徒の性に関する意識や行動の実際を男女比較したものを資料として付しておく。

【準備要因】

①「異性の身体へ触れたいと思ったことがあるか」(図1-①)

男子で「はい」が74.0%，逆に女子で「いいえ」が82.4%と全く逆の結果であった(P<.01)。

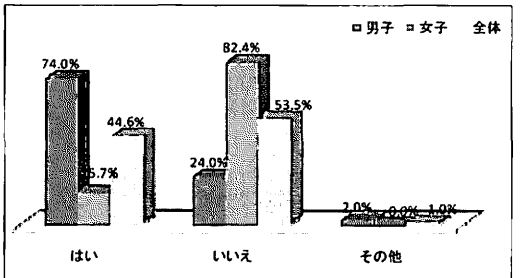


図1-① 異性の身体への接触意識(P<.01)

②「将来の結婚感」

将来の結婚意志では全体で90.3%であり，男女ほぼ同値を示した。この値は，全国値(年齢は異なるが，約60%強が結婚したくない)と大きく異なっていることに特徴がある。沖縄県のように経済的な問題を抱えるところではむしろ全国よりも「結婚意志」は低くなるのが予想される。仮に「結婚」を教材として扱う場合の「生徒」の意思を尊重し大事に育てていきたい項目である(図1-②-1)。

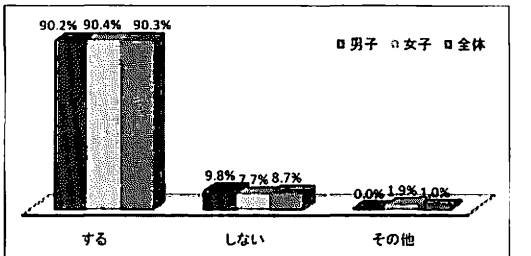


図1-②-1 将来の結婚意識

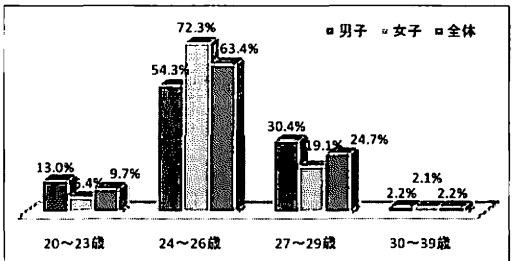


図1-②-2 結婚の希望年齢男女比較

図1-②-2に生徒の考える結婚を希望する年齢を示す。男女ともに24歳～26歳が多く，男子54.3%，女子72.3%である。

図1-②-3に「欲しい子どもの数」を示す。男性で2人が57.8%，女子で3人の44.7%となっており，平均で2人～3人となっているが，男女で有意に異なっていた(P<.05)。

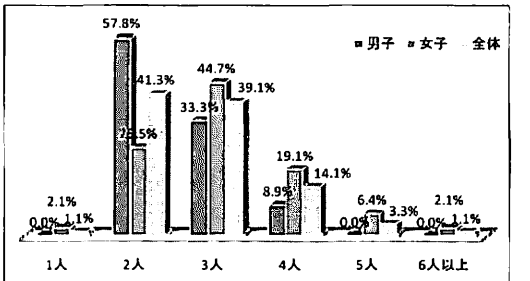


図1-②-3 欲しい子どもの数(P<.05)

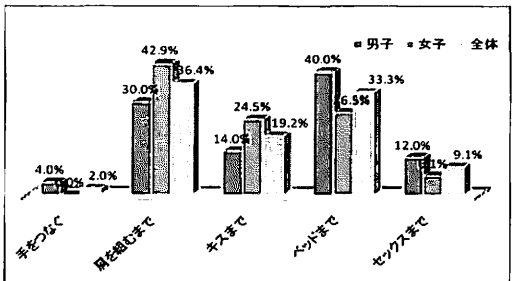


図1-③ 男女交際における性行為の許容範囲

③男女交際における性行動の許容範囲

性行動の許容範囲としては，男子では「ベッドまで」が40.0%，女子で「肩をくむまで」が42.9%と男女で違いがあるものの有意な差は見られなかった。

④高校生の性行為について

高校生の性行為について「かまわない」「どちらかというとかまわない」を合わせて56.0%となっている(図1-④)。その条件として，男子で「愛があれば」で36.7%，「お互い同意すれば」34.7%となっている女子では「結婚が前提であれば」で41.2%を占めている。

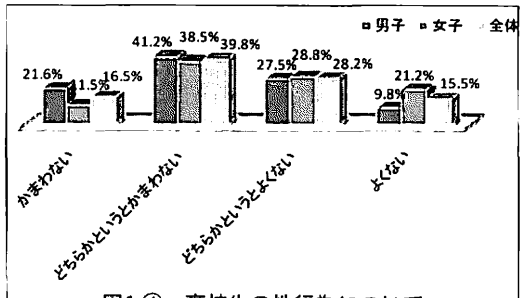


図1-④　高校生の性行為について

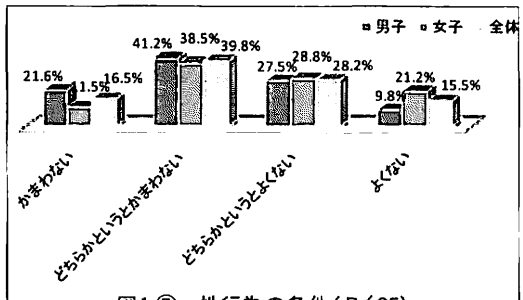


図1-⑤　性行為の条件(P<.05)

性行為の適年齢を男子では，18歳の46.0%が多く，女子では20歳の37.8%が最も多くなっている。

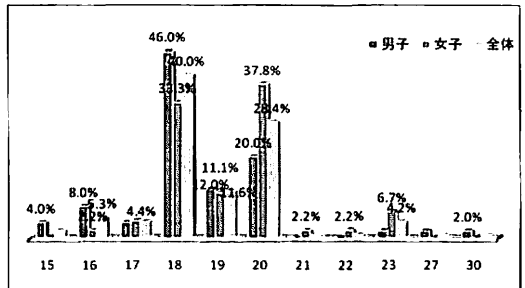


図1-⑥　初めての性行為適年齢

友人の性行為経験については，「関係ない」が男子で65.3%，女子で79.2%，「うらやましい」としたのは男子で20.4%となっており，統計的にも男女の違いがみられた(P<.05)。この項目は，友人の性行為経験を冷静に受け止めている(準備要因：認識)反面，男子において「うらやましい」としていることは，状況によってはこの項目が性行為の実現要因，強化要因に移行する場合もあることを裏付けている。

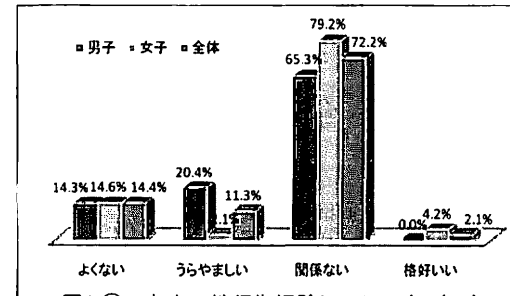


図1-⑦　友人の性行為経験について(P<.05)

⑤中絶に関する意識

中絶に関する意識として男女ほぼ同じ割合で全体の54.4%が「悪い」としているものの，39.8%が「わからない」としていることは，良し・悪しの価値判断は別として，判断する情報を提供することが保健科教育の課題である。

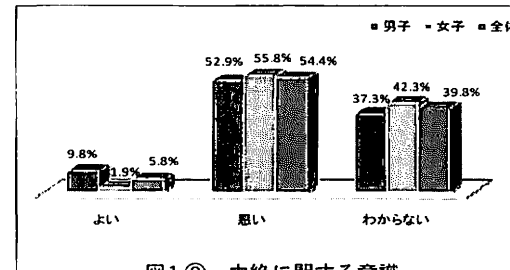


図1-⑧　中絶に関する意識

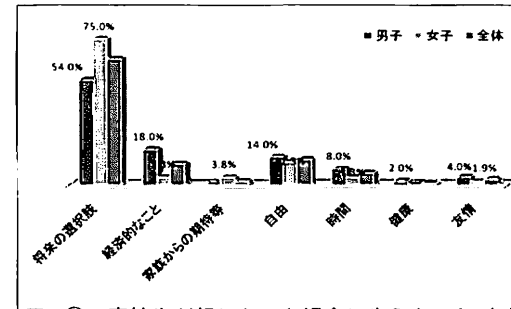


図1-⑨　高校生が親になった場合に失うもの(P<.1)

⑥高校生で親になった場合

高校生で親になった場合の認識として（失う

もの)，男子では「経済的なこと」18.0%，女子では「将来の選択肢」で75.0%となっている。この項目でも男女の違いが見られた（P<.01)。

【強化要因】

⑦性情報の入手方法

強化要因は，家族や友人（周囲の人々)，教師等の専門職の行動や考え方などその行動を強化する要因である。

図1-10に高校生の性情報の入手方法を示す。入手方法はむしろ行動を実現する要因に含まれるかも知れないが，ここではあえて強化要因とした。

情報源として最も多いのは，男子では「友人」の50.0%，「学校」34.0%となっている。女子では「学校」が40.0%，友人32.0%，特徴として「家庭」が14.0%となっている。男女の違いが傾向としてみられた。「友人」や「学校」が性情報源になっていることは，保健科教育での情報の提供の仕方によって実現要因，強化要因いずれにも影響すると考えられる。

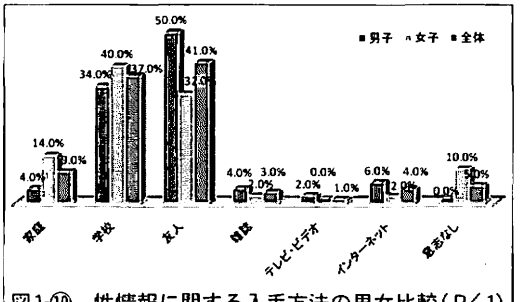


図1-⑩　性情報に関する入手方法の男女比較（P<.1)

妊娠した場合の相談相手も強化要因としてあげられるであろう（図1-⑱)。男女ともに「親」が最も多く，男子で40.0%，女子で55.8%である。その他「家族（兄弟等)」も13.5%となっている。女子の特徴として「友人」が23.1%と男子の2倍になっている。男子では「医療機関」が16.0%となっており，男女の違いが見られた(P<.05)。

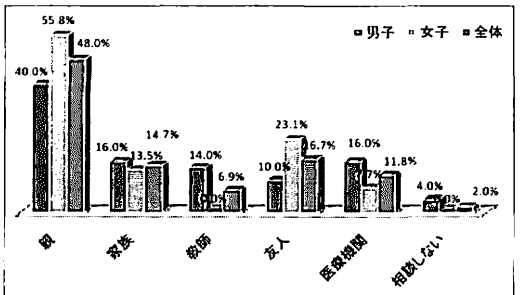


図1-⑱　妊娠した場合の相談相手（P<.05)

【実現要因・行動要因】

⑧セックスの誘いへの対応

この項目も「断る」ということができるかを左右する「断るスキル(コミュニケーションスキルに位置づく)」の場合は実現要因として働くし，「断る」行動という意味では行動要因に位置づくであろう。

ここでは区別せず実現・行動要因とした。

男女に違いがみられ(P<.05)，「同意して受け入れる」が31.4%となっており，性行為(行動)へ進みやすいという意味では「実現要因」として働いていることが予想される。その一方の項目「時期が早いと断る」では，男子19.6%，女子の31・4%となっている。保健科教育の課題として，断るスキル(コミュニケーションスキル)やいろいろな状況や場面での意思決定するスキルの獲得が望まれる。

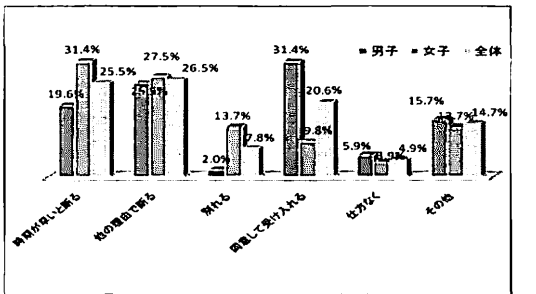


図1-⑯　セックスの誘いへの対応（P<.05)

【行動要因】

将来のSTD感染やHIV感染に関する意識はどちらかというと前提要因にあげられるのが当然であるが，将来感染する危険性が高い低いと考えていることは，将来感染行動をとるという意味で行動要因に位置付けた。

⑨性感染症の感染に関する意識

将来感染する危険性があるとしていることは、感染行動をとる可能性が高いことを意味する。STD感染では，男子で33.3%，女子で21.6%と全体の27.5%で危険性があるとしている。HIV感染でも同様な傾向となっている。

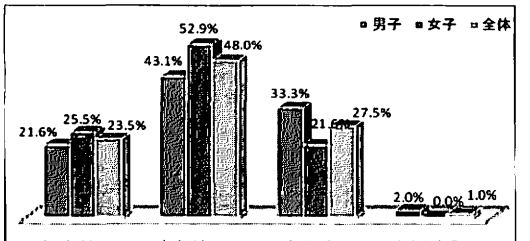


図1-⑪　STD感染の危険性に関する意識

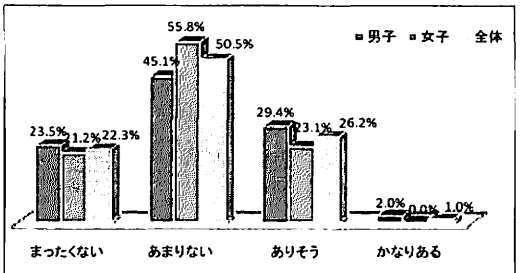


図1-⑫　HIV感染の危険性に関する意識

⑩知人の性行為経験

知人の性行為経験を知っている・知っていないそのものは，友人の影響という意味では強化要因や実現要因として働くことが予想されるが，ここでは知人の性行動(身近な高校生)という意味では「行動要因」に位置づくであろう。

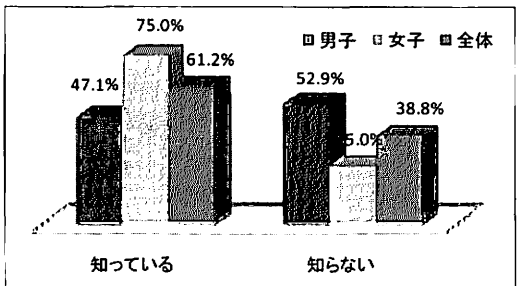


図1-⑬　知人の性行為経験の有無(P<.01)

「知っている」とした者では男子の47.1%よりも女子で75.0%とかなり高い状況にある(P<.01)。

⑪避妊と妊娠について

避妊措置については，「必ずする」とした者が多く男子で76.5%，女子で92.2%である。男子で若干低い傾向にある(図1-⑭)。

図1-⑮に妊娠した場合の対応について示す。「中絶」するとした者で女子に多いのが気になる。「結婚して出産」では男子が若干多く58.8%，女子で51.9%となっている。「一方出産して育てる」では女子で9.6%と高くなっている。

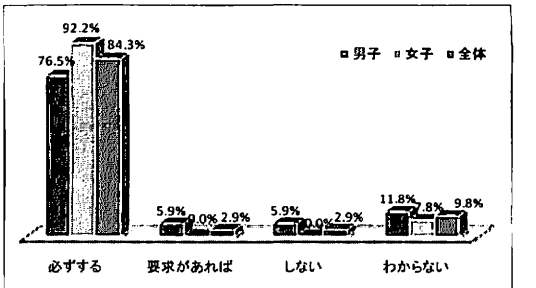


図1-⑭　性行為の際の避妊措置について

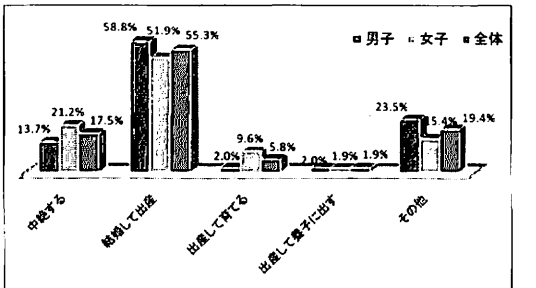


図1-⑮　妊娠した場合の対応